

1959年6月30日、嘉手納基地を飛び立った2機のジェット戦闘機の1機に異変が発生。爆発し炎上する機が、旧石川市の市街地に墜落。機体の一部は宮森小学校の校舎を直撃。のどかで楽しいミルク給食の時間に突然起こった爆発音と衝撃は一瞬にして11名の児童の尊い命を奪ってしまった。

死者17名、負傷者210名、住宅17棟、公民館1棟、3つの教室が全焼、住宅8棟、2教室が半焼した。戦後最大の米軍飛行機墜落事故である。

目前で友達の死を目撃した子、生徒を奪われた先生、子どもを失った親、月日が経っても癒えない傷…。

「忘れないけど、忘れてほしくない」という遺族の言葉には、二度とこのような事故が起こらないように、事故を風化させないでほしいという強い願いが込められている。



## 母校への想い

今年4月に宮森小に赴任した平良嘉男校長は、当時、2年生であり、事故の状況を目の当たりにしたひとりである。

赴任後、保護者へあてた「校長だより」の中で、次のような想いを綴った。

## 忘れることのできない事故

4月1日付けで母校に赴任した。始業式、入学式、入園式等と行事が立て続いた。ほっと一息ついた4月10日(木)の朝、校庭と運動場に足を運んだ。中庭の「な

かよし地蔵」を手で撫で、ジェット機事故犠牲者の刻銘を目でなぞった。教師として、また3名の子を持つ親となった今、幼気(いたいけ)な子どもたちが犠牲になったことに胸が裂かれる。

その「なかよし地蔵」の背後に建立された「平和の鐘の塔」。壁面に形取られた手形は、元気で卒業した子どもたちのものだ。生きている子どもたちの体温が伝わってくる。塔の鐘に目を向けると、鳴らす者もないのに平和の鐘が心に響いてくる。さらに歩を進めて運動場へ。東側ブロック塀沿いに立ち並ぶ木々、たしかモクマオウ?だったか植樹をしたことが浮かんできた。たたずんで眺めていると涙がこみ上げてきた。この地に生を受け小学校6年まで過ごした故郷。その思い出は豊かな人情と自然だった。

しかし同時にその思い出を粉々に打ち砕いてしまうジェット機墜落事故が浮かんでくる。当時2年

生だった。まだ癒されないトラウマだ。我に返ると、新緑の香りを運ぶ春風が「お帰り」といつて涙を拭いてくれた。「ただいま。帰ってきました。」と答えた。

## 風化を危惧する

あの事件は関係者にとつては生涯忘れることのできない事故である。同窓の仲間が命を奪われた(私たちの同年である2年生は7人)。その事故で心身ともに傷を受け、痛みを未だに背負っている私たちである。

6月30日の10時40分、あの事故に遭遇したお互いは、犠牲にあつた仲間や同窓の方々のためにも、また次代を担う児童生徒達、さらには県民のためにも、宮森小学校ジェット機墜落事故を風化させてはいけない使命が担わされているのではないか!